

之勸也。略中 今日胸腹兩所灸了、灸七草也。

〔高倉院嚴島御幸記〕八日。治承四年四月家のしやうをこなはる。略中 かくて御やせもたゝならずなど

きこえて、くすしども申す、めて、御きうちなどぞきこえし、

〔源平盛衰記 十五〕宇治合戰附賴政最後事

明春、心ハ猛ク思ヘドモ、手負ケレバ引退テ、平等院ノ門外、芝ノ上ニテ、物具ヌギ置、甲冑ニ立所ノ

矢、六十三、大事ノ手ハ五所也、閑所ニ立寄テ、彼是灸。治シ、頭ハカラゲ、弓打切杖ニツキ、平足駄著テ、

略中 奈良ノ方ヘゾ落行ケル、

〔玉海〕治承五年二月廿八日乙巳、傳聞邦綱二豎有煩、今日加灸治。百六十憲基治之、定成云、物體雖非

大事、次第療治相違、病者身弱有其怖云々、

養和二年。壽永元年八月八日丙午、召典藥頭定成加灸治。十二箇所賜單重、瘡病之後、不經程灸治、人以不甘

心、然而依本病無術強所灸也、

〔今物語〕少輔入道蓮。寂ときこえしうたよみあり。略中 風の氣有て灸治之けるに、人のとぶらひて

侍りける返事に、

年へたる風のかよひぢたづねずば蓬が。關をいかゝすへまし

〔吾妻鏡 二十五〕承久三年六月十四日丁卯、武州。北條越河治。宇不相戰者、難敗官軍由相計。略中 同

時發、矢兼義、貞幸乘馬於河中、各中矢漂水、貞幸沈水底、訖欲終命、心中祈念、諷方將神、取腰刀切甲之

上帶小具足、良久僅浮出淺瀬、爲水練郎從等被救訖、武州見之、手自加數箇所灸之間、住正念、所相從

之子息郎從等以上十七人沒水、

〔葉黃記〕寛元四年八月廿二日戊申、院。堀河御浴可爲廿六日云々、醫師勸賞祿間事、頗有沙汰、又内々

有御尋先例、仍隨所見注進了、依御二禁及御灸例、不分明也、但仁安二年閏七月、後白川院御二禁、雖